

むかし、若い者がおおぜい集まって、

「今夜、ひとつ、きもだめしをしないか」ということになりました。

「どこでやるうか」

「明神山みよつじんやまに登ろう」

「よし。明神山のてっぺんまで登ることにしよう。とちゅうで帰ってきたらだめだぞ。てっぺんまであがって帰ってきた者に賞金だ」

「うん、そうしよう」と、話がまとまりました。

夜になると、みんなは村のお宮に集まって、くじ引きで登る順番を決めました。

一番くじを引いた者が、まず出かけて行きました。明神山のふもとまで行って、そこから登りはじめたのですが、なにやら、からだがすうすう寒くなってきました。

（これはいかん）と思いながらも、しんぼうして、二合目にごうめくらいまではどんどん登っていききました。ところが、そのうち、寒くてがまんできなくなりました。

（これは帰ったほうがいいぞ。かぜをひいたらつまらない）と、山をおりました。

お宮にもどると、みんなが、

「どうしたんだ。えらく早いなあ」といいました。

「それがな、こわかったわけじゃない。寒くって帰ってきたんだ」

「なんだ、つまらん」

つぎの者が、

「こんどはわしの番だ」といって、でかけました。

「先のやつは、おくびようだなあ。あんなに早くもどってきて、はずかしくないのかなあ」と、ひとりごとをいいながら登っていききました。どんどん登っていくと、なるほどからだがじこじこ寒くなってきました。

（ほんとに寒いぞ。あいつのいったとおりで）

そう思いながらも、

（もうちょっと登ってみよう）と、四合目あたりまで登りました。ところが、寒くてからだがじんじんしてきて、どうにもなりません。

（これは、とても登られん）と、山をおりました。

みんなは、

「おまえもだめだったか」といいました。

「どうにもわけがわからん。おまえが行っても、きっと登れないぞ」

「そうかなあ。まあ、とにかく行ってみよう」と、三人目がでかけていきました。

どんだんいきおいよく歩いて、五合目くらいまで登ってきました。

「ここまできたら、あとひと息だ。ちよつといっぷくしよう」

男は、たばこを出していっぷくしました。そのとき、山の上からものすごい風が、ザアアーツとふきおろしてきました。寒くて寒くて、

(これはたまらん。身の毛もよだつって、こういうことだ)

そう思っていると、また風が、ザザアーツとふいてきて、髪の毛が一本のこらずさか立ちました。

(これは、とても登られん。帰ろう)と、山をおりました。

だれもてっぺんまで登ることができません。とうとう、さいごのひとりになりました。

「おまえたちみんな、おくびようだなあ。おれが登りきってやる」

どんだん、どんだん走って、五合目をすぎ、七合目まで登りました。そうしたら、いきなり、ものすごい風がふきおろしてきました。月は雲にかくれて、まっくらやみです。そのやみのなかから、ザアザアザアときみような音が聞こえてきました。

「いよいよでるぞ。なにかでてくるぞ。ようし」と、どきようを決めてじっと立って目をこらしました。すると、目の前に、「あああー」とさけんで、髪ふりみだしたおばあさんがあらわれました。

(あの風はこいつのせいだな)と思って、じいっと立っていました。すると、おばあさんが、

「おまえはだれじゃ」といいました。

「だれでもいい」

「ほう、おまえはどきようがあるのう」

「それは知らんが、おまえはどうして、こんなことをして人をこまらせるんだ」

男がきくと、おばあさんは、

「わしは、人をこまらせているわけではない。わしはただここに住んでいるだけだ。おまえらが勝手にこまっているんじゃないろう」といいました。そして、

「さてと。では、今夜はおまえを食うとしよう」といって、大きい口をわあっとあけました。男が、

「ぎゃあああ」といって、よく見たら、おばあさんの口のなかには歯が一本もありませんでした。

「あ、こいつ、はなしだ」

歯がなくて、はなし。

おしまい。

村上郁再話

資料『千代田町昔話集』大谷女子大学説話文学研究会